

飯田未希著

『非国民な女たち』

——戦時下の
パーマとモンペ』



評者：難波 知子

私たちがイメージする戦時下の日本女性像といえば、「贅沢は敵」というスローガンのもと、モンペをはいて質素な身なりをした姿だろう。ところが著者によれば、物資が不足していく終戦間際になっても、女性たちは禁止が叫ばれたパーマメントや、敵国である「米英式」のブラウス・スカートの洋装美を求めて止まなかったようである。女性たちのおしゃれは戦時下の社会ではとりわけ批判され、繰り返し自粛・自省が求められたが、それでもなお主体的な判断に基づいておしゃれを実践する女性たちがいたのである。本書は、戦時下においてクリアに浮かび上がる女性のおしゃれをめぐる批判を検証しながら、女性のパーマや洋装がどのように意味づけられたか、さらに女性がどうあるべきと考えられ、それに対して女性側がいかに対応したのかを、具体的な証言や写真を用いて論証している。著者の眼差しはおしゃれを求める女性たちに寄り添い、戦時下を生き抜いた女性たちの姿に迫る。

序章では、戦時下のパーマ禁止やモンペ着用のイメージを覆す、女性たちの姿や行動が示される。特に印象に残ったのは、ドレスメーカー女学院の杉野芳子の回想である。洋裁学校に通

う女子学生たちは上京するとパーマをかけるのが慣例だったため、院長の杉野芳子が時局柄パーマの自粛を呼びかけたところ、翌日いっせいにパーマをかけてきたという。その事態に対し、杉野芳子は「戦争だからもうこれからはかけられないのだ、これが最後だ、と思うとかけずにはいられなかった若い女性のおしゃれへのいとおしみ……。これはけっしていけないことではない、いじらしいとさえ思った」と述べている。女子学生本人の証言ではないが、パーマへの切実な思いが伝わってくる。洋裁学校以外にも、パーマや洋装は工場地帯で働く下層の若い女性たちの間にも浸透し、高学歴で比較的裕福な女性のみならず、幅広い階層の女性たちに受け入れられていった。パーマは1937年に国民精神総動員中央連盟で禁止が決議され、法的規制はなかったものの、女性団体などの活動を通じて自粛が呼びかけられた。洋装は特に太平洋戦争が始まった1941年以降、「米英式」として批判され、1942年には男性の国民服にあたる女性の婦人標準服という戦時にふさわしい「正しい」服装が示された。しかし国家が示した「正しい」方針に皆が従ったわけではなく、禁止・批判された「正しくない」髪型や服装を選ぶ女性たちが少なからずいたことが確認できる。またパーマや洋装への批判が繰り返されたこと自体、それらが反対運動にあってもなくならなかったことの証拠でもある。なぜ、女性たちは「非国民」と非難されてもパーマや洋装を実践したのか。またそれがどのように実現可能であったのか。著者の問題意識は、女性の“おしゃれ”を支えた美容業者や洋裁専門家の戦時下における活動にも及ぶ。

本論は二部で構成される。第I部「パーマメント報国と木炭パーマ」（第1～2章）では、パーマをめぐる批判や規制への検証とともに、

終戦までパーマが広がり続けた理由が探られる。

第1章「戦時中にも広がり続けたパーマメント」では、パーマの意味づけと地方へのパーマの広がりが論じられる。パーマは肩までの長さの「短髪」を可能にした活動的なスタイルであったが、戦時色が強まるにつれ、「奢侈的」なものと捉えられ、排斥運動が起こった。しかしパーマは禁止されて消滅するどころか、地方へも広がりをみせた。茨城の水戸では1941年にパーマ機が設置された美容院が17店、岩手では1943年に19店以上確認される。地方でパーマが実現するためには、パーマ機の普及と美容師の技術習得が必要である。パーマ機は1935年に国産化され、製造業者たちが全国各地に販路を開拓していくとともに、パーマ技術の講習もセットで行われた。1937年以降、パーマ禁止の呼びかけが盛んになってもなお、製造業者はパーマ機をつくり続けたが、パーマ機に使用される金属や電力の使用が制限されると、「木炭パーマ」と呼ばれる電気を使用しない道具を開発した。戦時下の統制による物質的な制限の困難を乗り越えていったパーマ機製造業者たちのたくましさには驚かされる。さらにパーマに関わる美容師や製造業者などは、戦時下の逆風の中で彼らの営業権を守るため、1939年に「大日本電髪理容連盟」を結成した。「パーマメント」を「電髪」と置き換え、戦時にふさわしいパーマの髪型を提唱し、パーマが「報国的」であると再定義する活動を展開した。国家への恭順を示すことで、パーマ業界の生き残りを図ったのである。

続く第2章「パーマメント大流行」では、1940年代以降も美容室にパーマをかけに殺到した女性たちの様子や金属および電力の使用制限の問題から開発された「木炭パーマ」の普及について論じられる。1935年のパーマ機の国

産化はパーマの低価格化を実現し、さまざまな階層や職業の女性の間パーマを普及させた。そうした女性客が各地の美容室に殺到し、店先に長い行列ができ、美容師たちは早朝から深夜まで（前日から泊まり込みで待つ客もいた）営業し続けた。空襲の際に防空壕の中でパーマをかけたという証言まである。さらに興味深いのは、木炭パーマに使用される「木炭」を女性客が持参したことである。木炭パーマはコテを木炭で熱して髪にウェーブをつけるもので、パーマ機に使用される電力が制限された1943年以降に普及したが、このときには木炭も配給制となっていた。美容室に営業のための木炭は配給されなかったことから、客の持参する木炭を見込んで美容室は営業していた。美容師と客の連携がなければ、この木炭パーマは成立しないのである。しかも、配給された木炭をパーマのために持参するという行為は、本来家庭で家族のために使用されるべきものを美容目的のために「個人的」に女性が使用するという意味において、女性規範を逸脱するものであった。女性には家庭を通じての国家貢献や戦争協力が求められたが、その理想とかけ離れた木炭パーマには当然厳しい批判が寄せられた。しかし終戦間際まで木炭パーマの流行は衰えず、女性たちは「非国民」と言われながらもパーマをかけ続けた。

第Ⅱ部「モンペと女性ファッション」（第3～5章）では、戦時にふさわしい婦人標準服やモンペを着用する姿が模範的な女性イメージとして示された一方で、それとは異なる次元で“おしゃれ”な洋装、ファッションが戦時下においても展開していたこと、また「正しい」服装に対する女性たちの反応が検証される。

第3章「和服から洋服へ——変化の時代」では、戦時期に一般女性の間で洋装や洋裁への関心が高まり、おしゃれ着として洋装を着用する

女性が増え、女性たちに洋装美が広く共有され始めたことが指摘される。戦時期以前の洋装については、女学生や職業婦人の制服として着用されていた事例があるが、それらは一部の女性に限られ、またその洋装はおしゃれ着ではなかった。洋装がおしゃれ着として一般女性に認識され、実践に移されるようになるためには、洋装観の変化、すなわち洋装が美しいもの、着てみたいものにならなければならない。そうした変化に一役買ったのが、都市的な消費文化を広く伝える映画・デパート・婦人雑誌などの各種メディアであった。特に婦人雑誌には、欧米の最新流行や、洋服を着るために必要な下着の着け方や手入れの方法、洋裁専門家による婦人洋服の作り方などの記事が頻繁に掲載され、実際に着ることを前提とした情報が提供されていく。しかし、おしゃれな洋装情報が何でも雑誌に掲載されたのではなく、時局に合わせた意味合いが付与されなければならなかった。そこで洋装普及を目指す洋裁専門家たちは、古着を利用してつくる「更生服」という戦略をとった。各家庭の箆笥に眠る貯蔵衣料の活用は、戦時の原材料統制への協力と肯定的に捉えられ、更生服であれば、新しいデザインの洋服をつくるのが許されたのである。こうして戦時下においても婦人雑誌には魅力的なデザインの洋服記事が掲載され、流行の洋服を着たい、つくりたいと思う女性を増加させた。

続く第4章「婦人標準服をめぐる激論」では、戦時にふさわしい女性服として制定された婦人標準服が、洋裁専門家や一般女性の支持を必ずしも得られなかった理由が論じられる。婦人標準服には「洋服型」と「和服型」の二種類があり、洋服型には着物の襟のような前合わせが採用された。長袖・長裾の和服は戦時下の生活には不向きとされ、機能的な洋服が評価を得ていくものの、「米英式」の洋服をそのまま取

り入れるのではなく、デザインに一捻りが加えられている。洋裁専門家の中には、自らが経営する洋裁学校で婦人標準服の仕立て方を教授し、積極的に普及に協力した者もいた一方、婦人標準服から距離を置き、関わろうとしなかった者もいた。後者の専門家たちは軍服製造の勤労奉仕などに積極的に協力し、決して国策に非協力的な態度を見せたわけではなかったが、婦人標準服の機能性、着心地、美しさに一定の「ひっかかり」をもっていた。甲型の着物襟の前合わせは胸前が開いて不便だったり、ふくらはぎを覆うスカート丈が足さばきを妨げたり、活動性に疑問を呈する者もあれば、デザインを固定（標準化）することが、個性に合わせた洋装美から遠ざかると考える者もあった。デパートでは婦人標準服の展示販売を行ったが、ほとんど売れず、一般女性の興味をひくことができなかった。婦人標準服は広範な普及を引き起こす「流行」とはならなかった。戦時期には各種メディアに加え、洋裁学校で学んだ卒業生たちが地方で洋服の仕立てを行ったり、洋服づくりを教えたりし、一般女性と洋装の橋渡しを担った。次第に女性たちのおしゃれな洋装の基準・価値観が共有され、そうした洋装美の共有が婦人標準服に魅力を感じない消費者を生み出したのではないかと結論づけられる。

第5章「モンペをはくのか、はかないのか」では、婦人標準服で「活動衣」として示され、空襲が始まった頃に普及したと言われるモンペに対して、女性たちがどう思っていたのかが検証される。メディアでは、モンペを着用した女性の姿が体制への恭順を示すシンボリックなイメージとして強調された。特に農村の女性たちがモンペで銃後を支える姿が称揚され、女性のモンペ姿は「報国的」なイメージとして捉えられていく。しかし都会ではなかなかモンペの着用が普及せず、その原因を洋裁専門家たちはモ

ンペの「不恰好」さにあると考え、ズボンやモンペの改良を提案した。モンペは「報国的」で「正しい」服装ではあったが、「不恰好」だとされた。都会の女性たちは、地方から出てきて勤労奉仕するモンペ姿の女性たちを「違った世界の人たち」と冷淡にみる者もいた。一方の地方の女性たちは、都会の女性たちの「瘦せた」姿を国策的な「健康美」の観点から否定する者もいたが、背筋の伸びた姿勢の良さを評価する意見もみられた。背筋の伸びた姿勢は、洋裁専門家たちの間で洋装を美しく着こなすために必要と主張されていたことであった。地方の女性たちの中にも都会の女性たちや洋装美を支持する意識があり、農村女性に向けられたモンペ姿の模範的な女性像を必ずしも理想として内面化していない様子が窺える。洋装美は都会の「不道德」な女性たちだけでなく、地方の「模範的」な女性たちの間にも避けがたく浸透してきていた。東京市では1943年3月から防空服装日が設けられたが、学校から指示のある女学生を除き、モンペの着用者は多くみられず、銀座では「ぞろり着流し」や「スカート一枚の女」など「戦争傍観者」が多数見られたという。モンペも「強制」というイメージほど、すべての女性たちが着用していたわけでもなく、またそれを理想として受け入れていたわけでもなかったといえよう。

第6章「人々が守ったものは何だったのか」では、本論の総括が述べられる。戦時下の度重なる批判・規制にもかかわらず、女性たちはパーマやおしゃれな洋装を求め続けた。関連業者たちも国家への恭順を示して事業継続を図った。女性たちも関連業者たちもただ批判され、それに耐えただけではなかった。新聞にパーマや洋装を擁護する意見を投書し、「正しい」とされる意見や風潮に対して自分たちの考えを表明する女性もいた。もの言う女性は、国家や社

会に期待された「模範的な」女性像を内面化した婦人会の女性指導者だけではなかったのである。社会の側から期待される価値観に対して、それとは異なる意見の「応答」が女性の側からみられたことは重要である。終戦を迎えた1945年8月15日の当日にパーマをかけに女性客が現れたという秋田の美容師の回想が物語るように、終戦直後からパーマや洋装を求めて、女性たちは再び美容室や洋裁学校に殺到した。戦後のパーマや洋装の普及は、これまで占領軍が持ち込んだアメリカ文化に対する憧れと解釈されてきたが、ここまで本書を読んだ読者は、それが不十分な見解であったことを認めざるをえないだろう。女性たちの外見やおしゃれをめぐる変化は、戦時下においても途切れることなく、着実に進行していたのである。

本書は、服飾史を専門とする立場からみても、十分に期待に応えるものであった。特に評者は着用者側がどう考え、行動するのかを重視して研究を進めており、時代風潮や社会規範と着用者の価値観・行動とのズレに興味をひかれた。本書は「一般女性」という捉えにくい対象に対して、パーマと美容師・美容業者、洋装と洋裁専門家をセットにして検証を行うことで、具体的な証言を導き出すことに成功している。資料的な制約を承知で敢えて言うならば、一般女性の声をもう少し拾うことができたらと思う。例えば、「農家のおかみさんには髪をさっぱりした方が働きやすいと洋髪を勧め好評だった」(100頁)という岩手の美容師の証言があるが、「農家のおかみさん」にとっての「働きやすい」髪型やその背景にある悩みは何なのか。同様のことは洋装にも当てはまる。女性たちの洋装観の変化を都市的な消費文化の大衆化が引き起こしたとしているが(126頁)、具体的なきっかけや洋装美の内実を女性たちの証言

から捉えられたらと思う。また本稿では触れることができなかったが、本書でも取り上げられている女工の作業服やおしゃれもまだ十分に研究が進んでいない。評者は富岡製糸場の女性労働者の作業服について調査に携わった経験があるが、女性たちの思いを汲み取る資料や証言の少なさに苦労した。着用者への視点は興味深いことは確かだが、多くの困難も伴う。著者の今

後の課題をうかがい、資料的な制約をどう乗り越えていくべきか、ぜひとも議論してみたい。
(飯田未希著『非国民な女たち——戦時下のパーマとモンペ』中公選書, 中央公論新社, 2020年11月, 274頁, 定価1,870円(税込))
(なんば・ともこ お茶の水女子大学生生活科学部准教授)